



看護師の介助のしやすさよりも まず患者さんのことを考えた設計。



病棟の分散型の車いすトイレには、背もたれ、跳ね上げ手すり、L型手すりなどを設置。巻上巾木で清掃のしやすい空間になっている。

新別府病院は、温泉観光都市・別府市のほぼ中央に位置し、1955年の開院以来、「Science & Humanity」の理念のもと、急性期対応病院として地域医療に貢献してきました。病院創立60周年という節目もあり、足掛け4年にわたるプロジェクトによって、限られた敷地内において既存棟の一部を解体し、新しい病棟を建設。残った既存棟も改修し、新しい病院への大規模なリニューアルを推進しました。休むことなく診療を継続しながら、患者さんのための病棟機能などを充実させています。



正面玄関の左側に見えるのが新病棟である。

患者さんのプライバシーに配慮して 廊下側から入る設計の分散型トイレに。

救命救急センターを持つ急性期病院ですが、高齢者の割合は高いため、病棟のトイレには背もたれを設置し、以前は少なかった車いすトイレの数を増やしました。4床室のトイレは、今までの集中型から分散型に変え、患者さんとの距離を近づけました。介助のしやすさよりも患者さんの気持ちやプライバシーを優先し、廊下側から入る設計のトイレにしています。

特徴的な取り組みは、若いスタッフも参加した有志による「カラーコーディネート委員会」。新病棟の海側(A棟)をブルー、山側(B棟)をグリーン、メディカル機能をピンク、診療機能をイエローのエリアカラーにしてサインと連動させるなど、参加型の取り組みによって病院づくりを行いました。サインの施工は、最初からプラスチックで本物を作るのではなく、まず一度紙で作って1か月ほど使用。位置や文字の大きさなどを確認・検討した後に正式なものを製作するという流れで、現場での人の感覚を大切にしています。



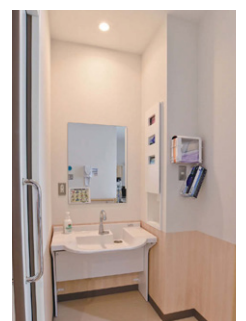
最上階の4Fには、別府ならではの景色と温泉が楽しめる源泉かけ流しの展望風呂を設置。

新別府病院 新病棟新築工事

- 竣工年月 / 2016年5月
- 所在地 / 大分県別府市大字鶴見3898
- 施主 / 国家公務員共済組合連合会
- 設計 / 株式会社総企画設計
- 延床面積 / 約14,300m²(新病棟部分)
- 病床数 / 269床



海と山の美しい立地をサインに生かし、海側にはブルーで別府湾、山側にはグリーンで鶴見岳をモチーフにしたデザインを施している。



4床室の出入口に設けられた、車いすで使いやすい洗面カウンター。



エントランスホールには、病院の理念である「Science & Humanity ~科学する心と人間愛~」が掲げられている。



スタッフステーションの出入口には、非接触式のスタッフ用手洗器が設けられている。



外来に設けられたオストメイト対応の多機能トイレ。ベビーチェアも用意されている。



特別室のシャワー、手洗器、トイレ。手洗器の横には感染対策のために、個人防護具の収納棚を設置している。



55室の個室のうち10室には、8角形のトイレ・シャワーユニットを採用。これによってベッドのまま患者さんを移動させる際の余裕も生まれている。

事務部の方からの声

診療を続けながらの移動には苦勞もありました。



新別府病院
事務部長
吉野博さん



新別府病院
事務部 施設課 係長
那須信彦さん

診療を継続しながらの大規模な建て替えには苦勞もありました。病棟の引越は2回に分けて行い、患者さんの移動はほぼ半日で終わりましたが、外来の改修における大きな移動が4回もあったことはかなりたいへんでした。

設計担当の方からの声

災害拠点病院の役割を強化する空間も設けました。



株式会社総企画設計
福岡支店 設計部
担当部長
澁田幸弘さん



株式会社総企画設計
福岡支店 設計部
課長
西嶋香さん

今までは分散していた病棟を統合し、1フロアに2ユニットずつ配置しました。建物を集約して新たな空間を生み出し、災害拠点病院として災害時のトリアージや物資の供給などに備える防災対策広場を作ることもできました。

看護師さんからの声

患者さんを第一に考えたポータブルトイレの廃止が、ご本人や同室者のためになっています。



看護部 次長
宮下千恵子さん



A2病棟 師長
三浦あずささん



B2病棟 師長
猪口典子さん

排泄は患者さんの基本的な欲求ですから、看護師の介助のしやすさよりも、まず患者さんのことを考えました。4床室を出たところにトイレを設けたのは、患者さんの気持ちを使い、近さよりも入りやすさを優先したからです。今回トイレの数を増やしたことで、今まで使っていたポータブルトイレをなくしました。最初は大丈夫かと不安もありましたが、特に問題はありませんでした。また、以前はベッドサイドのポータブルトイレに自分で移動しようとして転倒するリスクがありましたが、看護師を呼んで介助を受けながらトイレへ行くことで、排泄行動による転倒事故は減っているように感じます。さらに、ポータブルトイレを使わなくなったことでニオイの問題がなくなり、本人と同室の方のQOLも上がっています。トイレへ行くことがリハビリになり、ADLも向上していると感じます。感染対策の視点から、病棟にはオーバーフローの付いた手洗器は採用していません。また、トイレ内で手洗いできること、消毒用アルコールをすべてのトイレに設置すること、温水洗浄便座は除菌水付きにすることなどを要望し実現しました。



感染対策管理室
感染管理師長
稲田志信さん



医療安全管理室
専従リスクマネージャー
八坂明美さん